

総合討論

テーマに関するまとめ



テーマに関するまとめの討論

司会 縣 秀彦（国立天文台）

記録 高梨 直紘（東京大学）

The Final Session : A Discussion of the Main Theme

Chair : Hidehiko Agata (NAOJ)

Report : Naohiro Takanashi (the University of Tokyo)

Abstract

We report a brief summary of the final session in which we have a discussion of the main theme of the 28th annual meeting, “what will we do in the next step”. About 70 people joined the session, and exchanged their thinkings about the theme. As a result, we confirm we Tenkyo should become a hub of networks of Japanese communities related education and public outreach of Astronomy.

1. はじめに

本稿は、年会最終日に行われた「テーマに関するまとめの討論」の報告である。第 28 回天文教育研究会では「天文教育普及活動の次の一步を探る」をメインテーマに掲げたが、これに関する一般発表に加え、少人数グループに分かれての分科会を初日と二日目にそれぞれ行った。初日の分科会 1 を受けて行われた二日目の分科会 2、そしてその分科会 2 を受けて議論を行ったのがこの「テーマに関するまとめの討論」である。

このセッションは、パネル討論形式で行われた。パネリストは、二日目の分科会 2 のグループ毎に代表者が選ばれ、壇上にあがって司会とのやりとりの下で議論をリードした。登壇したのは、学校教育分野からは中山健二氏（熊本市立健軍小学校）と野口亮氏（尼崎市立武庫東小学校）の 2 名、社会教育分野からは間瀬康文氏（ギガスター実行委員会）と岸篤宏氏（川崎市青少年科学館）の 2 名、一般教育分野からは斉藤啓子氏（日本科学未来館ボランティア）、学生としては竹中慶一氏（京都産業大学/神山天文台ボランティアチーム）の計 6 名であった。会場全体では 70 名ほどが参加した。パネル討論に先立ち、最初に分科会 2 の報告が各グループの担当者から行われ、それを踏まえての討論となった。以下、その要点について報告したい。

2. 議論概要

本セッションは、最初にも述べたように「天文教育普及活動の次の一步を探る」ことを目的にしたものである。天文教育普及活動には、どんな可能性が開けているのだろうか。それを議論していくためには、まずは天文教育普及活動に興味、関心を持つ人たちが集まる場があることが必要不可欠である。本会はそのような場のひとつであるが、しかしながら、ここ数年は会員数も頭打ちとなり、全体として高齢化が進みつつある。そこで、まずは本会にどんな魅力があるのか、足元を見つめるところから議論をスタートした。

最初に本会の魅力のひとつとして話題にあがったのは、ネットワーク機能である。「学生が少ないとは言え、横のつながりができるのはありがたい」とは学生である竹中慶一氏の言葉であるが、日本天文学会や東亜天文学会、日本天文愛好者連絡協議会などさまざまな団体がある中でも、本会は参加者の多様性と敷居の低さではユニークな立ち位置を保っており、それは参加するための魅力となっているようだ。会場からも指摘があったように、天文冬の陣や瀬戸内アストロリーグのように学生の天文サークルが自主的に運営している集まりもあるが、支部会の開催などが長

期間にわたり継続的に行われていることは、もっと評価されても良いだろう。

このような本会により多くの人が集まるためには、どうしたら良いのだろうか。本会のウェブサイトに関係する団体へのリンクを用意する等、会員の協力があればすぐにできる方法も議論されたが、Facebook 等の新しいツールの活用可能性についても意見が出された。Facebook については利用を積極的に考えるべきという意見に対して、その使い方の難しさや管理にかかるコストを指摘する声もあり、結論を出すには至らなかった。

一方、ネットワークにも情報のネットワークと、人的なネットワークのふたつの意味があるという指摘もあった。ただ情報を提供して、なにか活動と呼びかけるだけでは、人々はあまり動かない。人々に行動を起こさせるためには、例えば地域のネットワークに入り込んでそこで働きかける等、ポイントを突くことが大事であるとの指摘である。「本会に参加している皆さんは、それぞれのネットワークを持っているだろうから、それを集約すべきではないか」という間瀬康文氏の発言は、この人的ネットワーク機能のハブとして本会を捉えるべきだとの指摘であろう。

本会を取り巻く環境の変化を見ても、この方向性は適切であるように思われる。本会が立ち上がって以降、PAONET や日本公開天文台協会 (JAPOS) などさまざまな天文系組織が立ち上がり、本会設立当初のように天文教育普及に関心ある人たちが集まれる機会や場所がほとんどない、という状況ではない。より小さなスケールにおいても、インターネットなどのツールを活用することで、関心の近い人たちがグループを形成することがより簡単になってきている。そういった状況下でも、会費を取り、会誌を発行し、日本学術会議協力学術研究団体[1]として活動をしている天文教育普及に関わる団体は、日本天文学会を除けば本会のみである。他のいろいろな団体を意識しつつ「本会が日本の天文教育普及のハブになり、そのためのインフラとして存在すべきではないか」という鈴木文二氏の発言は、会の立ち上げ期から本会を眺めてきた人間の発言として重みがある。

しかし、さまざまな活動を行う個人や団体の人的ネットワークのハブとしてあるためには、具体的にはなにをしたら良いのだろうか。その点については、嶺重慎氏の「直接顔を合わせる場を用意することだ」という指摘が当を得ているだろう。顔と顔を合わせることで始まる対話があり、それはインターネットでは得られないものである。「誰かがハブになるのではなく、自らがハブになる気持ちが必要だ」という同氏の指摘は、もっともと言える。

では、顔と顔を合わせる場を増やしていくためには、どのような方策があるだろうか。年會を2 回行うのはどうかという強気な意見や、支部会を増やすべきという声も聞かれた。また、回数を増やすのではなく参加人数を増やすために、他団体と共催したり、より積極的に案内を流す、あるいはテーマを絞って開催することについても意見が交わされた。支部会の実施計画も早めに立てて、会誌に案内が載せられるようにすべきというしごくまっとうな指摘もあった。年會の場においても、初めて会う参加者同士が積極的に意見交換できるよう、懇親会の前に初めての参加者の発表を持ってくるなど、より一層の工夫が必要であろう。できること、すべきことはいろいろある事が確認された。

一方、ハブ機能を担う上で重要なインフラのひとつである会誌「天文教育」についても意見が交わされた。より積極的に会誌を利用してもらうためには、投稿のための敷居を下げる必要があるであろう。そのためには、「支部会でいろいろな発表があった際には投稿を促したり、初めて投稿する人には誰かが指導するのが良いのではないか」という水野孝雄氏の意見が参考になるだろう。また、これまでに会誌に蓄積されてきた過去のデータの活用も課題である。バックナンバーを探すための方法や、CiNii (NII 学術情報ナビゲータ サイニィ) [2]の活用についても、もっとわかりやすくすべきとの指摘があった。

このような会の方向性に、どうやって学校の教員を巻き込んでいくか、ということも重要な観点のひとつであろう。特に参加の割合が小さいのは、小学校の教員である。小学校の教員の中には理科嫌いの人間も多く、特に天体観望会の実施については後ろ向きな意見も少なくない。教育活動の中で「実際に星を見せた学校と、そうでない学校の数を調べておくと、天文教育を推進していく上で説得力がある」という野口亮氏の指摘は、会として抑えるべき統計のひとつだろう。

また、ほぼ全教科を担当せざる得ない小学校教員の置かれた立場を考慮して、むしろ理科専科の教員を充実させて、天文教育のハブとすべきという意見もあった。そのように理科教育に専念することで、「なぜ星なのかということを常に考え続ける」ことが大事であるとする中山健二氏の発言は、今後の小学校における理科教育のあり方を考える上で、本質的な指摘であろう。

なお、会場では、他にも世界ひかり年 (The International Year of Light, IYL) の話題や、国際天文学連合 (International Astronomical Union, IAU) 国際アウトリーチ室 (Office for Astronomy Outreach, OAO) で進めている「太陽系外惑星のネーミング」に関する話題、さらには天体観望会などのイベント開催時の保険に関する話題などについても発言があったことを付記しておきたい。

3. おわりに

本セッションは「天文教育普及活動の次の一步を探る」という今年の年会のメインテーマについての議論を目的としたものであった。結論としては、本会が天文教育普及活動におけるハブ機能を担っていくべきことが確認されたと言って良いだろう。議論の内容は天文教育普及活動全体を念頭に置きつつも、本会のあり方についての議論に重点が置かれたが、本会ならではの俯瞰的な視点が随所に見られたのではないと思われる。長期的視点で考えなければいけない課題から、明日からでも対応できる課題までさまざまな課題が示されたが、これらの課題にどのように取り組んでいくかについては、会場に参加した者だけでなく、会全体で当事者意識を持って考え、実行していくべきものであろう。時間的な問題もあり、本セッションでは議論が十分に尽くされたとは言いがたい。議論の続きは、各支部会や来年度以降の年会等の機会を通じて深められていくことを期待したい。

参考文献

- [1] 日本学術会議協力学術研究団体
<http://www.scj.go.jp/ja/group/dantai/>
- [2] CiNii (NII 学術情報ナビゲータ サイニィ)
<http://ci.nii.ac.jp/>